

体験談

被害妄想から感謝の気持ちへ

S.N.

（ニドムの会 会員 20 代男性）

私は過去 1 年半に渡り覚醒剤を使用しておりました。東京に住んでいた時に、町で知り合った男性から誘われたのが始まりでした。私の覚醒剤の使用方法は俗に言う「ポンプ」と呼ばれる摂取方法で、自らの腕に静脈注射するものでした。初めて使用した時は、倦怠感がなくなり、何でもできるような感覚になったことを覚えています。最初は月に 1 回程度の使用頻度でしたが、その内に回数が増え、2 日に 1 度は使用しないと安心できなくなっていました。しかし使用したからといって、安心感が得られることも気分が落ち着くこともなく、毎晩のように被害妄想に苛まれるようになりました。また覚醒剤を買うために、友達や両親、そして会社の人からもお金を借りる始末でした。それから次第に会社にも入社しなくなり、お金も底をつき、夜中に路上で泣いてしまうこともありました。そこで初めて何とかしなくてはと思い、近くの病院に行き、札幌太田病院を紹介されました。診察中も不安や被害妄想に苛まれ、主治医にまで嘔み付くように話していました。

入院してすぐに病棟内・内観療法が始まり、自分の過去を一つひとつ丁寧に振り返ることとなりました。しかし、その行為は自分にはとても億劫でなりませんでした。おそらく覚醒剤によって真剣に考えることが出来なくなっていたためです。その状態で内観療法を続けることがとても苦痛でしたが、ふと気づいた事もありました。人生の中で、自分がいかに家族から愛されていたかということです。そして覚醒剤によってその愛をどれだけ裏切ってきたか気づき、深く反省しました。内観療法を受けなければ、自分は覚醒剤の被害者だという自己中心的な考え方を持ち続けていたと確信できます。また、気づきを得ることで、社会復帰に一步近づくことができたというささやかな自信と、立ち直ろうとする勇気も持つことができました。

現在は仕事をしながら、ニドムの会（断薬会）に出席しています。ミーティングに参加し、感謝や反省を話し合うことができ、お互いに支えあっていることが実感できます。再犯率の高い覚醒剤依存者にとって、ニドムの会はとても助けになっています。

このような場を提供してくれた札幌太田病院と、最後まで見捨てずにそばで支えてくれた家族に感謝しています。